

もう一度、言葉を交わす大切さを

畝傍高校58回生 白井 卓也

第58回卒業生の白井卓也と申します。この度、歴史ある金鶏会の会報誌に寄稿文を書かせていただけることに心から感謝いたします。本当にありがとうございます。

僕は今、檀原市で市議会議員として働かせていただいています。同期当選である井ノ上剛さんと年齢や会派は違いますが、同じ学び舎で過ごした同窓生同士、互いに切磋琢磨をして市政を進めています。

さて、この寄稿文を書くにあたり、高校時代のことを思い返すと、僕は決して優秀な生徒ではなかったと思います。むしろ先生方の手を煩わせた、いわゆる「問題児」でした。三年生の時には担任の先生から、「学校が決めたことに耳を貸さないのなら、

学校を辞めなさい」とまで言われたことを覚えています。

それでも、そんな僕が母校で学び、今も大切にしていることがあります。それは「言葉」の力です。家族の言葉、友の言葉、恩師の言葉、本や映画の言葉……一つひとつを挙げれば、キリが無いくらいの言葉に支えられ、励まされ、勇気づけられてきました。

皆さまもご存知の通り、日本では古来より、言葉には言霊が宿ると信じられてきました。奈良時代の歌人である山上憶良は、「神代より 言ひ伝えて来らくそらみつ 大和の国は 皇神の厳しき国 言霊の 幸はふ国と語り継ぎ 言ひ継がひけり（神の時代より言い伝えて来ていることには、この大和の国は、神々

の靈威に満ちていて、言霊の幸を受けた国だと語り継ぎ、言い継いで来た）」と万葉集に歌っています。これは自らも遣唐少録として入唐し、帰還の困難さを身に染みて知っていた憶良が若き遣唐使に送った言葉であり、幸いをもたらすという「言霊」に饑の祈りを託したものでした。

また、民俗学者であり、国文学者の折口信夫は、この「言霊の幸はふ国」とは、「言語精霊が能動的に靈力を発揮することを言う」と述べており、困難に立ち向かう時にこそ、この言霊の力を信じるこの大切さを伝えているものとしています。

現代の僕たちを取り巻く環境は、まさに困難の時代です。テクノロジ―と自動化技術によって沢山の仕事が消え去り、少子高齢化や核家族化、地元への所属意識も消えてきています。その中では、多くの人が取り残され、抑圧されていると感じ、その空白感をなんとか埋めたいとあがいています。

だからこそ、もう一度人と人が向き合って、言葉を交わすことがなによりも大切なのではないのでしょうか。難しい言葉は必要ありません。1979年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサも、「やさしい言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっと心にこだまする」と言っています。「ありがとう」や「おはよう」、「また会おうね」といった、温かく、さり気ない言葉と、その奥にある思いやりや譲り合いの心こそが困難の時代においては最も大切なのです。

平成31年の本年、31歳を迎える僕と同級生の「平成」がまもなく幕を閉じようとしています。これからどういった時代に移っていくのかは想像に難く感じますが、変革の時代にもゆるぎない「言葉」を大切にしながら、人と人を結ぶ絆を忘れずに皆さまと共に歩んでいければと思います。